

佳作

戦争について学んだ夏

佐賀県唐津市立厳木中学校二年 森隼星

今年の八月中旬、私は八年ぶりに鹿児島県の知覧町に家族で出かけた。目的は、今年の五月に亡くなった曾祖母の初盆参りをするためである。唐津市厳木町から車で四時間半。知覧町の整然とした街並みを見た父親から、道路沿いに灯籠がたくさん並んでいるのはなぜだか知っているのかを尋ねられた。私は、この時点では何もわからず答えることができなかった。富屋食堂のことも知らなかった。そんな私に父は、来年修学旅行に行く前に学校で習うのだから、勉強するように言われた。その後、曾祖母宅で昼食を済ませ夕方、宿泊先の指宿のホテルへ移動した。

次の日の朝、散歩に出かけた両親が、慌てて戻ってきて知覧特攻平和会館に行こうと言いだした。散歩中に出会った地元の方にすすめられたそうで、そ

の日の予定を急ぎよ変更して、再び知覧の町へ行くことになった。初めて行く知覧特攻平和会館は、近くに戦闘機が二機置いてあり、その内の一機は、隼という名前だった。父に聞くと、曾祖父は知覧町出身のパイロットだったそうで、名前を隼美といい、その隼の字を父と自分が受け継いでいることを知っていた。遠く離れた知覧という町と自分の名前が繋がっていることを知り急にあの戦争が身近に思えてきた。

知覧特攻平和会館に入ると夏休みということもあり人が多かった。奇しくもこの日は、八月十五日終戦記念日だった。ここでも不思議な縁を感じた。館内では、特攻隊の人たちが、親や兄弟宛てに書いた手紙が数多く展示されていた。手紙のあて先は、両親、祖父母兄弟など家族に宛てたものが多く、その手紙を一つ一つ読んで、私と同じくらいの年齢の若者たちが次々と特攻作戦で命を落とす当時の凄惨な状況に衝撃を受けた。私の家族も色々なことを考えさせられたようだ。その後、佐賀に戻ってすぐ、父が『あの花が咲く丘で君とまた出会えたら』という昨年の冬に上映され大ヒットした特攻隊の若者が登場するDVDを借りてきて家族みんなで映画を観た。この映画で一番印象に残ったのは、最後の手紙の

場面である。主人公の百合を妹のようだと言って、出撃した彰が残した手紙には、百合に対する本心つまり大きな愛がまっていた。特攻平和会館に展示されていた特攻隊の方々も、それぞれに愛する家族がいて夢や希望があったはずだ。たくさんの遺書には、大きな愛がまっていたのではないか。そう考えると涙が出そうになった。

ここまできて、父が最初に私に質問してきた意味が少しわかった。なぜ道路沿いにたくさん灯籠が並んでいるのか、富屋食堂が特攻隊の方たちにとつてどのような場所であったのか知ることができた。一年後、中学三年生の九月に再び鹿児島県の知覧町の地を訪れる。それまでに、事前学習でもっと詳しくあの戦争は何だったのか考えたいと思った。